

クラス担任のための Career Guidance

2016 >> VOL.33

「キャリアガイダンス 特別編集」



失敗力を育む

生徒がいろいろな場面で積極的に行動したり、何かに挑戦したり。そんな力を育てていくためには、多少の失敗にもめげない様々な体験が重要。そのために必要な環境づくりを考えてみます。

取材文／清水由佳ライター（キャリアカウンセラー）

前向きにチャレンジする環境づくりとは

発言しやすい雰囲気 クラスづくりが「挑戦」への一歩

これからの社会を生き抜く力として、自ら考え行動し、物事を成し遂げる力が求められることが多い。だからこそ、多くの企業で、採用試験の書類や面接において「これまでに挑戦してきたこと」と、明確に「挑戦」エピソードを聞かれることが増えている。ところが、最近の高校生は「挑戦」に尻込みしがちだと感じている先生は少なくないはず。実際、高校生自身に、「将来社会で働くにあたり、必要だと思う能力と現在も持っていると思う能力」を問うと、必要とされることとして1番多かったのが「主体性」で2番目が「実行力」だが、自分ももっていると思う力とのギャップが最も大きかったのも、この2つの力だった（表参照）。

筑波大学附属坂戸高校の栗飯原匡伸先生も、生徒の挑戦意欲の低さが気にかかっている。

「コミュニケーションが小さくなっていると思うんです。友達ウケさえすればいいというか。そのため、あえて何かに

毎日のSHRで、生徒が クラスの良いところを発言

そこで、栗飯原先生が行っているのは、毎日のショートホームルーム（帰りの会、以下SHR）で、必ず「今日の良かったこと」をHR委員・副委員から

言ってもらおうこと。

「教師からではなく、生徒同士が相互評価する。それが大事だと思っています。最初は「良いことだけではないか、こうしていきましようというような話でもいいですか？」と聞かれましたが、そこはきっぱりダメです。クラスの良かったところを見つけてもらうようにしました（栗飯原先生）

毎日、クラスの仲間が自分たちのクラスの良かったことを言う。それから担任・副担任が気付いたことを加えていく。次第に、クラス全体の雰囲気

が柔らかくなり、体育祭での取り組み内容や席替えなど、生徒から積極的にSHRの時間に議題が提案されるようになってきたという。9月の文化祭に向けては、夏休み中もタ

スクンにグループで活動を進めている。

「私が生徒にお願いしているのは2点のみ。一つは、グループ内では必ず全員に連絡し、全員で活動するようにということ。もう一つは、意見が合わないときにケンカはしないということ。これまでの活動の様子から、意見を話し合っていないところ、ケンカとは違うとわかっているところ、思っ

て伝えました」

生徒が相互に関わっていく場としてのクラスづくりを意識する栗飯原先生。根底にあるのは、「教師が何とかしようと頑張っても、生徒自身が考え、発言していかないと意味がありません。私は生徒を信頼して待つのみです」という生徒への信頼感だ。

生徒の成長を「信じる」 絶対的な姿勢が大切になる

中高一貫校の千葉県立日出学園の進路指導部長、釣島ゆきの先生も、そんな生徒への信頼の重要性を痛感している。

「昨年度から、中学2年生の職業体験は、学校がお膳立てするのではなく、

当初は、中学生ではまだ難しいのではないかと、何か迷惑をかけるのではなく、様々な心配の声もあがっていたという。しかし、生徒がやり遂げる様子を見近にして、「少し背伸びをして挑戦する機会を提供する大事さ」を、先生たち自身も実感したという。

「生徒には挑戦するように言いますが、どこかで教師自身が躊躇しているのではないのでしょうか。間違っているのだからやってみる。生徒が主体的、自主的に動き出すのをどこまで待てるのか。教師自身が試されているのかもしれません（釣島先生）」



日出学園中学・高校
進路指導部 部長
釣島ゆきの先生
国語科教員として、中学・高校生の授業を受け持つ傍ら、3年前より進路指導部長を務める。生徒だけでなく保護者も、既存の枠組みの中で生き残ることを考えがち傾向があるなかで、いかに低学年から将来を考える機会をつくるかに奮闘。



筑波大学附属坂戸高校
国語科
栗飯原匡伸先生
一橋大学で学生支援を行うなど、大学での教職員経験や公立高校教員を経て、4年前より現職。今年度より、1年生全体のアンガーマネジメントのプログラムづくりにも挑戦している。大東文化大学で教職科目の教鞭もとる。

「挑戦」できる生徒を育むヒント



明治大学 文学部
諸富祥彦教授
もとみ・よしひこ／臨床心理士、教育学博士。全国の悩める教師のためのセルフヘルピングやネットワークを支援する「教師を支える会」代表。http://morotomi.net/

1. 安心感・安全感を抱ける関係をつくる

生徒がまず、何かに「挑戦」しようと思ったとき、その場が「安心・安全である」ということが大事です。つまり、教師との関係において、常に評価基準をおびえてしまっているから挑戦ができない。「どんなときも、先生は見離さないよ」という関係づくりが大事です。例えば、三者面談や進路面談などでも、生徒が「こんなことを言ったら、何バカなこと言っているんだ」と叱られるのではと思うから、チャレンジしようしない。ちょっと背伸びしているなど思っても、「そう考えているんだね」と受け止めてあげる。そんなふうにはチャレンジを受け止める姿勢が、まずは大切です。

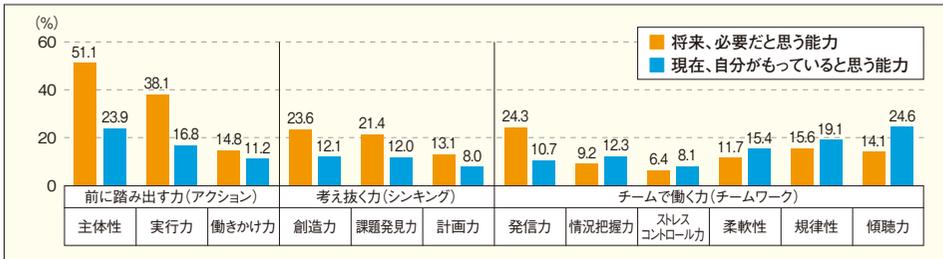
2. 何度でもチャンスを与える姿勢を示す

チャレンジすれば、もちろん失敗することもあります。うまくいかなかったとしても、それを責めるのではなく、「気にするな。大丈夫だ」と安心させる声かけも大事です。よく、「うまくいかなかったことを反省して次に生かすために、振り返りをしっかり行う」と言いますが、教師がそれをやらせることは「ダメだった」という評価をしてしまうことになり。ダメだったことは、本人が一番よくわかっています。特に最近、チャレンジして努力しても報われない時代、そんな風潮が強くなっています。でも、チャレンジしなければ何も手に入らないという事実です。だからこそ、「大丈夫だ。次頑張ればいい」と、何度でもチャンスを与える姿勢を、教師自身が示すことが大事です。

3. 教師自身が、挑戦する姿勢を示す

社会全体の中にある、挑戦しても必ずしも報われないというような風潮を、敏感に高校生が受け止めているのです。先生たち自身も、何かに挑戦することを、ぜひ態度で示してあげてください。また、そのような挑戦や、ご自身の過去の失敗の話など、高校生にぜひ話してください。アドラー心理学の勇気づけです。人生にはやってみることも多いけれど、100回のうち3回でもできればいいじゃないかと。そして、「先生と一緒に走り抜けよう！」という雰囲気をつくっていくことも大事です。そういう意味では、特にクラス担任を担当する30代の先生方は、まさに生徒にとって良き「アニキ・アネゴ」(分)笑)として、ぜひ頑張っていたいただければと思います。

将来社会で働くにあたり、必要だと思う能力と現在も持っていると思う能力(3つまで回答)



「高校生価値意識調査2015」(リクルート進学総研・2015年9月調べ)より

リウナビ進学 高校生の主体的な進路選択を応援する先生のための

Career Guidance

キャリアガイダンス 進路指導・キャリア教育の専門誌

【最新号】Vol.413 2016年7月発行

■特集
教室…部活動…学校外…
「リーダーシップ教育」で生徒が変わる

- リーダーシップ教育とは？
早稲田大学 大学総合研究センター 日向野幹也
- これからの社会における働き方
リクルートワークス研究所 主幹研究員 豊田義博
面白法人カヤック/ライフネット生命保険株式会社
- 動き始めた大学・高校の現場
立教大学経営学部/藤沢清流高校(神奈川県・県立)
東京都 教育委員会・都立高校
- 連載
●アクティブラーニング型授業への挑戦
鳥取城北高校(鳥取・私立)
- 地域課題解決型キャリア教育
伊佐農林高校(鹿児島・県立)

「キャリアガイダンス」誌は全国の高校に贈呈しています(校長、教頭、副校長、進路指導主事先生宛に郵送)
バックナンバーの記事はすべてWEBサイトで閲覧いただけます
http://souken.shingakunet.com/career_g/ キャリアガイダンス 検索